

地域子ども・子育て活動支援助成事業 実施報告書

団体名	地域子育て応援団 おいでおいでルーム
-----	--------------------

取組の名称	みんなで作る安心できる居場所
実施場所	川崎市中原区下新城2-7-30
対象地域	全区横浜市 (コロナ禍で中原・高津区にとどまる)
対象地域の 特色・課題	<p>●新型コロナ感染は、生活様式も様変わり、家族関係にもゆがみを生じ、終わりの見えない不安が育児にも影響した。近隣の居場所が次々に閉鎖され、行き場のない親子は朝に夕に公園やせせらぎに行くしかなかった。おいでおいでルーム以下ルームは、年間を通して、閉鎖することなく、新生活様式を守り、時短・予約制導入・人数制限・利用する際の約束事の徹底等、緊張感をもって、居場所の提供を続けた。今年度入会の利用者さんは、行くところがなくやっとここにたどり着いた等、利用を希望する親子を受け入れ子どもが安定して遊ぶ姿を見て、母親も元気になった。こうして、「みんなで作る安心できる居場所」をコロナ禍であったが築き上げられた。現在閉鎖や検討中の子育て支援の再開を心待ちしている。</p> <p>●父親の仕事形態が変わったことで、家庭内でも母親と子どもが居場所を失い、邪魔者扱いされたケースや精神的に病を抱え込むなど、人間関係を大事にすることで見えてきた相談の裏に隠された本質は、弱者への暴言や虐待につながるケースもあった。</p>

<p>取組の趣旨・目的</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●コロナ禍で存続も難しいなか、補助金や懸賞金のお陰で事業運営は何とか保つことが出来、年間の延べ利用回数は、1,497回、内訳は未満児を含めた0歳児391回・授乳と離乳食でアレルギー児はいたが、順調に進み食べる行動は、育児への余裕と自信につながり、母親が基地となって安心して遊ぶ姿は、他の利用者にも喜びとなった。 ●1歳児が226回、2歳児が575回、3歳児以上は305回 コロナ禍で更に家庭が孤立し、2歳から3歳の子どもたちの育ちに影響、個性・個人差を考慮しても、家庭の人間関係だけでは、子どもは育たない。社会の関わりが必要不可欠であることを遊びや食事面で痛感、経験不足が育ちや意欲に影響し、何より親が対応に苦慮する場面が目立った。コロナ感染のせいではない、育ちの気難しさを持った子どもも多くなったことも実感する。 ●特に集団生活に入る前の1年は、家庭に於いての育ちだけでは、心身の育ちは厳しいものがあり、居場所では、遊びの中で共たち関係やルールを覚え、みんなで食べる楽しさを積み重ねた。遊びは徐々に集団化するまでに育った。 ●今できることを精いっぱいする過程が、10年後・20年後のすべての結果になる事を常に認識して子育てをした。
<p>実施内容・実施スケジュール</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●3密を守るうえで、計画していたイベントは中止を余儀なくされたが、子どもの節目になる戸外で出来る季節的なイベントは、企画書をボランティアママも含めて共有し、安全のもとに制限付きで実施した。 ●活動内容の料金プランは、4・5月の緊急事態宣言時はルームを立ち寄り場として無料開放、6月からは通常に戻すが、料金プランについて、13時迄の時短利用10回半日券利用の回数券より1回500円の現金払いがおおかった。

	<p>●0・1歳児愛着形成と食事の育成は、心理職も関わる中で少人数の親子が触れ合い遊びを中心に行い、自分で食べる意欲等順調な育ちに、専門職からの言葉が何より育児への励みになった</p> <p>●2歳児(就園前)プレ保育は予定通り3回実施、7・3月は心理職を関わり、育つうえで親としてどう関わればよいのかアドバイスを受け、親が意識して生活を変化させ、集団への準備となった。</p> <p>●食の感覚過敏の子どもの対応は1年がかりで、子どもの気持ちを尊重、一つでも食べるものがあれば良いと基本に置き進めた結果、ご飯だけから何とカレーライスが食べられるようになり、みんなで喜びを共有した。 これもコロナ禍のメリットというか、予約制人数制限等のお陰で、個々の対応ができたことがあげられる。</p> <p>●コロナ感染により対面でのカウンセリング・子育て個人面談・食育の推進時短料理づくりなど、方法を模索したが行う事ができなかった。</p>		
参加者の年代	20代から40代	定員 (1回あたり)	8~10家族
実施頻度	週4日以上	活動日数 (年間)	211日
スタッフ体制	<p>・代表1名・副代表1名</p> <p>・ママボランティア6人(子どもの利用も兼ねる)</p> <p>※サブボランティア2名(うち1名は、発達障害をもつ)</p>		

<p>連携する団体・ 連携の手法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●公的機関との連携が必要なケースは、対面では難しくほとんどの手段は、メールやラインで対応にあたる。 ●中原区の子ネット会議やボランティア部会は、年度末に合同で開催され、コロナ禍に於ける子育て支援を話す機会を得た。多摩区でも行った。 ●コロナ禍で地域との関わりは何もできなかったが、同じ敷地内にある介護施設の職員や利用者さんに、手を振りエールを送り続けた。 ●介護施設の利用者さんも年々重症化し、戸外に出てくる機会もすくなくなりましたが、子どもの元気は即力になるので、遠巻きでもいいから、手を振るなどの関わりを大事にした。
<p>取組実施により 見込まれた効果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●コロナ禍の妊娠・出産はどんなにか不安であったか、出産後の様子は、「別に」と強がりの一面も見えた。また、高齢出産のケースは、育児への疲れが子どもに影響、子どもに翻弄され、生活経験の不足が目立ったが、ルーム利用で、徐々に生活の見直しが良い効果をもたらした。 ●子育ての考え方に疲れる母親「子育てにお金はいらぬ」という父親、それでも何とか頑張る母親に寄り添い応援した。 ●特に行動問題児は、コロナ禍のなか行き場を失う親子、ルームの見学から繋がり、早速に父親も挨拶に来る。その後療育ともつながり、ルームを利用しながら、育ちの支援はさらに続く。 ●3密にならないための方法として室内と外の空間も遊び場として利用する。特に2歳児は関わり遊びを楽しんでいた。親は寒いというが、子どもは風の子であった。 ●居場所の生活に一定のリズムが出来、室内遊びを楽しんだ後、自然に触れながら、散歩や公園で体を動かして遊び

そしてランチとなる。食後の様子だが、子どもたちは満足して、帰り迄の時間を好きな遊具で遊んでいる。13時になると、誰からともなくお片付け⇒本の読み聞かせ⇒さよならあんころもち⇒ごあいさつ⇒ダンゴムシ探しは雨でも行く。幼稚園入園後の姿は、緊張しながらも頑張っている様子、ママたちの安心した笑顔がルームの励みになっている。

●コロナ感染は、様々な影響をもたらした。次年度の活動は、事業を見直し変化しても地域社会の中で、安心して利用できる居場所は継続して行きたい。